

森鷗外が「舞姫」を書いた理由

3年4組

森 咲 喜

1. はじめに

(ア) テーマ設定の理由

私は「舞姫」という題名から、なんとなくロマンチックな恋愛小説をイメージした。しかし、実際読んでみると、ロマンチックというより暗い気持ちになった。加えて、この作品は森鷗外の実体験に基づいていると知り、なぜこのような自分の過去を告白するような小説を書いたのか、どんな意図があったのか非常に気になった。そこで、今回テーマを「森鷗外が『舞姫』を書いた理由」と設定し、森鷗外は何のためにこの「舞姫」を書いたのか、言いたかったことは何なのかを明らかにしたい。

(イ) 論の進め方について

- ① 本文を引用しながら、登場人物についてそれぞれどう描かれているか、特に主人公「太田豊太郎」について確かめる。
- ② 鷗外が「舞姫」を執筆した当時の様子を確認する。
- ③ ①と②で確かめたことをもとに執筆理由を明らかにする。

(ウ) 目指す結論

森鷗外が舞姫を書いた理由は、運命に従うしかなかった自分の生き方に対する説明(言い訳)と周囲の人々に対する反発である。

2. 本編

(ア) 作品に描かれる登場人物について

・太田豊太郎について

「石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、熾熱灯の光の晴れがましきも徒なり。今宵は夜毎にここに集ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。」

留学生仲間がみな外泊のため船を下りても豊太郎だけは船に残る。冒頭から豊太郎のまじめさ、落ち着きがわかる。

「目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新たならぬはなく、筆にまかせて書き記しつる紀行文、日ごとに幾千言をかなしけむ、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、」

以前、筆にまかせて書いた紀行文によって世間から高い評価を獲得したとさりげなく自慢していて、豊太郎が自信家であることがわかる。

「世の常ならば生面の客にさへ交はりを結びて、旅の憂さを慰め合ふが航海の習ひなるに、微恙にことよせて房の内にのみこもりて、同行の人々にも物言ふことの少なきは、人知らぬ恨みに頭のみ悩ましたればなり。この恨みは初め一抹の雲のごとく我が心をかすめて、スイスの山色をも見せず、イタリアの古跡にも心をとどめさせず、中ごろは世をいとひ、身をはかなみて、はらわた日ごとに九廻すともいふべき惨痛を我に負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の翳とのみなりたれど、書読むごとに、物見るとに、鏡に映る影、声に応ずる響きのごとく、限りなき懐旧の情を呼び起こして、幾たびとなく我が心を苦しむ。ああ、いかにしてかこの恨みを銷せむ。もしほかの恨みなりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すがすがしくもなりなむ。これのみはあまりに深く我が心に彫りつけられたれば、さはあらじと思へど、今宵は辺りに人もなし、房奴の来て電気線の鍵をひねるにはなほ程もあるべければ、いで、その概略を文につづりてみむ。」

ここで、豊太郎の手記は「恨み」を書いたものであることを示している。同時に、この「恨み」は「腸日ごとに九回すともいふべき惨痛」というほどの悩みで、豊太郎は深く傷ついているのがわかる。思慮深く、繊細な人物像として描かれている。

「余は幼きころより厳しき庭の訓を受けしかひに、父をば早く失ひつれど、学問の荒み衰ふることなく、旧藩の学館にありし日も、東京に出でて予備覺に通ひし時も、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎といふ名はいつも一級の首に記されたりしに、独り子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりそのころまでにまたなき名誉なりと人にも言はれ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎へ、楽しき年を送ること三年ばかり、官長の覚え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我が名を成さむも、我が家を興さむも、今ぞと思ふ心の勇み立ちて、五十を越えし母に別るをもさまで悲しとは思はず、はるばると家を離れてベルリンの都に来ぬ。」

豊太郎はかつて首席、学士、官僚という経歴を誇りにし、名を挙げ、家を興すという個人的成功を留学の目的としている。個人的成功を収めようとするエリート意識を持っていることがわかる。

「かくて三年ばかりは夢のごとくにたちしが、時来れば包みても包み難きは人の好尚なるらむ、余は父の遺言を守り、母の教へに従ひ、人の神童なりなどほむるがうれしさに怠らず学びし時より、官長のよき働き手を得たりと励ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風にあたりたればにや、心の中なにとなく穏やかならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表に現れて、昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり。……余はひそかに思ふやう、我が母は余を生きる辞書となさむとし、我が官長は余を生きる法律となさむとやしけむ。……官長はもと、心のままに用ゐるべき器械をこそ作らむとしたりけめ。」

留学して3年ほど経つ間に、大学の自由な風によって、豊太郎はエリートとして働いてきた今までの自分は「所動的」「器械的」人物だったと反省し「まことの我」に目覚めたと言っている。しかも、反省する中で、母親や官長への批判をさりげなく述べており、母親や官長に対して反感を持っていることがわかる。

「わが心はかの合歡のいふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす。我が心は処女に似たり。余が幼きころより長者の教へを守りて、学びの道をたどりしも、仕への道を歩みしも、みな勇氣ありてよくしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、みな自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、ただ一筋にたどりしのみ。よそに心の乱れざりしは、外物を捨てて顧みぬほどの勇氣ありしにあらず、ただ外物に恐れて自ら我が手足を縛せしのみ。」

ここでは、自分の心を合歡の木や処女にたとえ、自分は臆病で勇氣がないと言っている。自分の弱さを認めており、かえって謙虚さが感じられる。

「我が臆病なる心は憐憫の情にうち勝たれて、余は覚えすそばに寄り、『何故に泣きたまふか。所に係累なき外人は、かへりて力を貸しやすきこともあらむ。』と言ひかけたるが、我れながら我が大胆なるにあきれたり。」

「我が隠しには二、三『マルク』の銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をはづして机の上に置きぬ。『これにて一時の急をしのぎたまへ。質屋の使ひの、モンビシュウ街三番地にて太田と尋ね来むをりには価を取らすべきに。』」

「余とエリスとの交際は、この時までは、よそ目に見るより清白なりき」

「かかれば余ら二人の間には、まづ師弟の交はりを生じたるなりき。」

エリスとの出会いの場面では、エリスに声をかけたのは「憐憫の情」からの行為であり、援助の見返りも一切考えていないし、さらに、二人の関係も師弟のような高度な関係であることが示され、豊太郎の清い精神性、人間性がわかる。

「朝の珈琲果つれば、彼は温習に行き、さらぬ日には家にとどまりて、余はキョオニヒ街の間口狭く奥行きのみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出でてかれこれと材料を集む。」

豊太郎の熱心な仕事ぶりが描写されている。罷免された後も誠実に生きていることがわかる。

「『なに、富貴。』余は微笑しつ。『政治社会などに出でむの望みは絶ちしより幾年をか経ぬるを。大臣は見たくもなし。ただ年久しく別れたりし友にこそ会ひには行け。』」

この部分は、豊太郎が富貴に関心を持たないことを示し、豊太郎の誠実さが強調される。しかし、出世に無関心ながら、相沢や大臣に会うことを拒否したりはしない。大臣に会いに行くのではなく相沢に会いに行くのであると説明する。豊太郎のご都合主義、ずるさが感じられる。

「貧しきが中にも、楽しきは今の生活、捨て難きはエリスが愛。我が弱き心には思ひ定めむ由なかりしが、しばらく友の言に従ひて、この情縁を断たむと約しき。余は守るところを失はじと思ひて、おのれに敵するものには抗抵すれども、友に対しては否とはえ答へぬが常なり。」

相沢の忠告を受け、豊太郎はエリスとの関係を絶つことを迷いながらも約束する。自分に敵対するものには抵抗するが、友人の言うことには嫌といえないというのは何となく格好がいい気がするが、同時に自分勝手ないい訳めいたものを感じる。

「この間、フランス語を最も円滑に使ふものは我なるが故に、賓主の間に周旋して事を弁ずるものもまた多くは余なりき。」

通訳の役目で大臣についてロシアに行く豊太郎。ロシアでも豊太郎は有能で活躍する。こんなに有能なのだから、最終的にエリスを捨てエリートの道に戻る豊太郎の選択は仕方なかったのかもしれない。

「嗚呼、余はこの文を見て、初めて我が地位を明視し得たり。恥づかしきは我が鈍き心なり。余は我が身一つの進退につきても、また我が身にかかはらぬ他人のことにつきても、決断ありと自ら心に誇りしが、この決断は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との関係を照らさむとする時は、頼みし胸中の鏡は曇りたり。大臣は既に我に厚し。されどわが近眼はただおのれが尽くしたる職分をのみ見き。余はこれに未来の望みをつなぐことには、神も知るらむ、絶えて想ひいたらざりき。」

エリスの手紙を読んで豊太郎は大臣への信頼とエリスへの愛情が両立しないことを意識する。豊太郎は任された仕事を忠実にこなすだけで、大臣との関係に未来の望みをつなぐことなどまったく考えていなかった。豊太郎の純粋さがここでも強調されている。

「ある日の夕暮れ、使ひして招かれぬ。往きて見れば待遇殊にめでたく、ロシア行きの労を問い慰めて後、我とともに東に帰る心なきか、君が学問こそ我が測り知るところならね、語学のみにて世の用には足りなむ、滞留のあまりに久しければ、様々の係累もやあらむ、と相沢に問ひしに、さることなしと聞きて、おちぬたり、とのたまふ。その気色、いなむべくもあらず。あなやと思ひしが、さすがに相沢の言を偽りなりとも言ひ難きに、もしこの手にしもすがらずば、本国をも失ひ、名誉を引き返さむ道をも絶ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られむかと思ふ念、心頭を突いて起これり。ああ、なんらの特操なき心ぞ、『承りはべり。』と答へたるは。」

ついに豊太郎は大臣から帰国の誘いを受ける。エリスとの関係をとるか、大臣の要請に従うか。この時大臣の要請を承知しなければ、故郷を失い、名誉を挽回する機会を失ってしまうと考え承諾する。豊太郎の行為は正しいと思う。

「鉄の額はありとも、帰りてエリスに何とか言はむ。ホテルを出でし時の我が心の錯乱は、たとへむに物なかりき。余は道の東西をも分かず、思ひに沈みて行くほどに、行き会ふ馬車の馭丁に幾たびか叱せられ、驚きて飛びのきつ。(中略) 蒼然として死人に等しき我が面色、帽をばいつの間にか失ひ、髪はおどろと乱れて、幾たびか道にてつまづき倒れしことなれば、衣は泥まじりの雪に汚れ、ところどころは裂けたれば。余は答へむとすれど声出でず、膝のしきりにをののかれて立つに堪へねば、椅子をつかまむとせしまでは覚えしが、そのままに地に倒れぬ。人事を知るほどになりしは数週の後なりき。」

大臣の要請を受け入れ苦悩し錯乱する豊太郎。私は深く同情した。しかし、豊太郎は家にたどりついたとたんに倒れ、数週間意識不明になってしまう。そしてその間に相沢が訪ねてきてエリスに帰国の話を伝え、それを聞いたエリスは発狂する。豊太郎の意識が回復

したときには、もはやどうすることもできなかった。豊太郎は全快するがエリスは治癒の見込みがない。豊太郎の意識不明とエリスの発狂という偶然によって豊太郎の帰国は決定した。エリスの発狂にも、エリスを捨てて帰国することにも、豊太郎には何の落ち度も責任のない。運命に流される豊太郎の無力感、悲しみがわかる。

「ああ、相沢謙吉ごとき良友は世にまた得難かるべし。されど、我が脳裏に一点の憎む心、今日までも残れりけり。」

これは素直な豊太郎の気持ちだと思う。もし、相沢が出て来なければ自分は貧しいながらもエリスと、平和で楽しい生活を送ることが出来たのだ。だから帰国途中の船中で彼は苦しむのである。しかし、相沢の豊太郎に対する友情には涙ぐましいものがある。感謝こそすれ憎むなどとは見当違いで完全に責任転嫁だ。豊太郎の言動に心から賛成できないのはこの最後の一文にあった。

以上から、作者は、「太田豊太郎」をすばらしい才能を持ちながらも純粋で誠実すぎるため運命に従うかなかった人物として描いていると考える。

・エリスについて

「年は十六、七なるべし。かむりし巾を漏れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我が足音に驚かされて顧みたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて、もの問ひたげに愁いを含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に覆はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我が心の底までは徹したるか。」

「涙の泉はまたあふれて、愛らしき頬を流れ落つ。」

「彼は優れて美なり。乳のごとき色の顔は灯火に映じて微紅を潮したり。手足のか細くたをやかなるは、貧家の女に似ず。」

「その見上げたる目には、人に否とは言はせぬ媚態あり」

「一輪の名花を咲かせてけり」

「悲しみて伏し沈みたる面に、鬢の毛の解けてかかりたる、その美しきいぢらしき姿」

「掌中の舞をもなし得つべき少女」

エリスは全編を通じて可憐で美しくしかも控えめな女性として描かれている。悪く描かれているところは見当たらない。

・相沢謙吉について

「公使に約せし日も近づき、我が命は迫りぬ。このままにて郷に帰らば学成らずして汚名を負ひたる身の浮かぶ瀬あらじ。さればとてとどまらむには学資を得べき手だてな

し。この時余を助けしは、今我が同行の一人なる相沢謙吉なり。彼は東京にありて、既に天方伯の秘書官なりしが、余が免官の官報に出でしを見て、某新聞紙の編集長に説きて、余を社の通信員となし、ベルリンにとどまりて政治学芸の事などを報道せしむることとなしつ。」

「この時戸口に人の声して、程なく庖廚にありしエリスが母は、郵便の書状を持て来て余に渡しつ。見れば見覚えある相沢が手なるに、郵便切手プロシアのものにて、消印にはベルリンとあり。いぶかりつつも開きて読めば、とみの事にてあらかじめ知らするに由なかりしが、昨夜ここに着せられし天方大臣に付きて我も来たり。伯のなんちを見まほしとのたまふに、疾く来よ。なんちが名誉を回復するもこの時にあるべきぞ。心のみ急がれて用事をのみ言ひやる、となり。」

「余が胸臆を開いて物語し不幸なる閱曆を聞きて、彼はしばしば驚きしが、なかなか余を責めむとはせず、かへりて他の凡庸なる諸生輩をののしりき。されど物語の終はりし時、彼は色を正していさむるやう、この一段のことは、もと生まれながらなる弱き心より出でしなれば、いまさらに言はむもかひなし。とはいへ、学識あり、才能ある者が、いつまでか一少女の情にかかづらひて、目的なき生活をなすべき。今は天方伯も、ただドイツ語を利用せむとの心のみなり。おのれもまた、伯が当時の免官の理由を知れるが故に、強ひてその成心を動かさむとはせず、伯が心中にて曲庇者なりなど思はれむは、朋友に利なく、おのれに損あればなり。人を薦むるは、まづその能を示すにしかず。これを示して伯の信用を求めよ。またかの少女との関係は、よしや彼に誠ありとも、よしや情交は深くなりぬとも、人材を知りての恋にあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交はりなり。意を決して断て、と。」

「相沢の助けにて日々の生計には窮せざりしが、この恩人は彼を精神的に殺ししなり。大臣に従ひて帰東の途に上りし時は、相沢と議りて、エリスが母にかすかなる生計を営むに足るほどの資本を与へ、哀れなる狂女の胎内に残しし子の生まれむ折りのことも頼みおきぬ。ああ、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得難かるべし。されど、我が脳裏に一点の憎む心、今日までも残れりけり。」

困っているときは手を差し伸べてくれる。チャンスがあれば与えてくれる。非を責めるのではなく、心からアドバイスしてくれる。最後まで見捨てず面倒を見てくれる。理想の友人として描かれている。

・母について

「独り子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。」

「母の教へに従ひ、人の神童なりなどほむるがうれしさに怠らず学びし」

「我が母は余を生きたる辞書となさむとし」

出番は少ないが、教育熱心で息子に大きな期待を寄せていることが分かる。

(イ) 鷗外の「舞姫」執筆当時の様子について

鷗外は19歳で東京帝国大学医学部を卒業し、22歳から26歳までドイツへ官費留学をする。明治21年9月8日、4年間の留学を終え、鷗外は横浜に到着するが、それから一週間も経たない9月12日、ドイツからエリスという女性が彼の後を追って来日した。しかし、母・峰子の意向を受けた周囲の人達がエリスの帰国の費用などの面倒を見て追い返してしまった。帰国工作が進行する中、鷗外は何も主体的に行動することができなかった。このエリス問題は鷗外と同僚の間にも話題に上っていた。そして、翌年の3月、赤松登志子と結婚したが、登志子も鷗外とエリスの関係を疑っており、夫婦の間はすぐに暗礁に乗り上げていた。その年の暮れに「舞姫」を書き、23年1月に発表し、その直後に鷗外は家を出、それきり夫婦の縁は切れてしまった。

執筆の動機について、鷗外の妹は「ちらちら同僚などの噂にのぼるので、ご自分からさっぱりと打ち明けたお積りでしょう」と述べている。また、「舞姫」が発表される前に、鷗外は家族や相沢のモデルであるとされている賀古鶴所に対して朗読をしている。

(参考 『国語便覧』『人と作品 森鷗外』)

(ウ) 登場人物の描き方と鷗外の「舞姫」執筆当時の様子から

鷗外にエリスという恋人がいて、周囲の人たちによって仲を裂かれたのは事実である。だから、その失恋の悲しみ、エリスに対する謝罪の気持ちが「舞姫」執筆のきっかけになったことは間違いないと思う。それは豊太郎に「人知らぬ恨みについて述べよう」と語らせているし、エリスのことを可憐で美しい女性として描いていることからわかる。

しかし、完成後、まず家族や友人に朗読していて、わざわざエリスへの謝罪を聞かせるというのもおかしい。しかも、謝罪しているわりには、自分がモデルである豊太郎のことを悪い人物とは描かず、エリスと恋に落ちるときも、帰国を承諾するときも、いつもどこか謙虚で誠実、純粋な人柄が感じられるような描き方をしている。エリスが発狂したのも自分が意識不明のときで自分に責任はない。全て豊太郎が悪者にならないような描き方である。

執筆当時エリスとのことは友人や家族の間で問題になっていて、鷗外にはドイツ留学のことをきちんと説明する必要があった。そこで、友人や家族に対する自らの行為をきちんと説明するために「舞姫」を書いたと考える。しかも、ドイツ留学で自由な精神に目覚めたけれども、結局立身出世を目指す現実的な生き方選ばざるを得なかったことへの悔しさから、言い訳とも取れるような自分の立場を美化した作品を書いたのではないだろうか。

また、豊太郎の母や友人相沢について、肯定的な描き方をしているが、母はあっけなく死んだことにしているし、相沢には「一点の彼を憎むところ」が残っていると書いているので、教育ママでいつまでも自分のことをコントロールしようとする母や、自分とは違いエリートコースに行く友人にたいする反発もあったのではないかと考える。

3. まとめ

(ア) 結論

森鷗外が「舞姫」を書いた理由は、運命に従うしかなかった自分の生き方に対する説明（言い訳）と周囲の人々に対する反発である。

(イ) 疑問点

作品中の「官長」や「大臣」にもモデルがいるが、それらの人物について十分確かめることができなかった。また、「舞姫」の時代の社会制度や教育制度などについても詳しいことを調べることはできなかった。これらのことを理解すると、もっと別の理由が見つかったかもしれない。この点がまだ不十分であった。

(ウ) 参考にしたもの

図書	国語便覧 クリアカラー 人と作品 森鷗外 河合靖峯著
インターネット	近代文学研究会のホームページ 筑摩書房のホームページ